

織というものは個人個人が利用するのだ。組織の発展はそこからだと考えているが、それは幻想だろうか。今回の大学斗争で示されたAACK山岳部関係者の対応をみると、われわれの仲間は決して「いっちょよってかましたれ」の気魄を失ってはいないと考える。

第6号で事務長としてわたしは「AACKの動き」を事務的に書き、同時に会員諸兄の一層の活躍を期待する旨、記した。第7号でもそれを書かねばならないのだが、忠実な番頭面をすることに抵抗を感じ、「AACKの動き」とカッコに入れてしまった。わたし個人の感想である。これから、「事務長」として皆で考えたい。以上

岳士戯言

谷 泰

「いったいどうなってるというんだ？」

「ご臨終でしょうか？」

息をひきとると、人はぐっと重く肩にくいこんでくる。

「かついでるのは棺おけか？そんなものなら放り出せ。後世大事にかつぐ要はあるものか。親の遺言ですと／＼ふざけるな／＼そんな暇があるのなら、仲仕かつぎした方が、ずっと金になるというものだ。」

「それにしても、本当に死んだのでしょうか？」

「おまえの生命は一つしかねえんだ。要はお前がなんのため、この生命様を使うかだ。」

「ご臨終でしょうか？」

「えっ／＼だれがご臨終だと。おまえもか。」

.....

そういう当の男もウロがきた。なぜこんなかけ声を、葬列かも知れぬ男の列にむかって、かけつづけるのか。ヘルメット学生のデモの列の横あい、かけ声かけるOB全共斗男ならまだしもだ。機動隊とのみあいになったとき、第一線かけ出して、若手をふるいたたせる隊長にはなれなくても、まだかれは、一緒に前進する。だのに当の男は、ヤジ馬歩道の人ごみから、葬列らしい列をながめやり、勝手気ままな声をかけているにすぎないのだ。そして「生きてるのか死んだのか」と楽しみ半分、真面目半分たずねては、ながめている。

「機動隊が『カカレ』といって、学生を襲ったら、石を投げます。助けます？」葬列のような行列に、警察の一人も、ついてはくれまい。ヤジ馬歩道の人ごみに、みんなかくれてまぎれてしまった。こんなウロのきた、茶番じみた話が、夜半の酔いのビールの泡と一緒に、思い出されたのはいったいどうしてなんだろう。

フロンティアは、常に市民世界に安住せず、町がつくられはじめると、退屈し、テントをたたんで、荷馬車についで、地平の彼方めざして出発した。かれらにとって、都会や町は、祖先が斗い、父の霊がねむる故地ではあっても、生きつづける土地ではもはやない。父の撃たれた酒場の窓は、いまや、親に手をひかれた子供がオモチャの銃やインディアン服をみつけて立ちどまるショウウインドーになっている。町の名前は、フロントであ

ったことを示すウエスト・ポイントでも、じつは東部の町でしかない。フロンティアは競いあうように、ウエスト・ポイントをあとにして、新たなウエスト・ポイントを示す標識を建てた。そして、定着者がかつてのウエスト・ポイントという名を記念のために町につけたいのなら、新しい土地名はどんな名でもよい。勝手な名をつけて満足する。名前なんてどうでもよいのだ。

本当にアドヴェンチャラスなことをする人は、アドヴェンチャーをするなどと公言して出かけたりしない。アドヴェンチャーであることさえ気づかずにやってしまう。中尾佐助さんがあるときこういったそうである。本当だ。使い古された手拭いのように汚れた、アドヴェンチャーという言葉は、私は更生して使おうと思わない。

バイオニア、アドヴェンチャー、それらかつて人の心をさわがせ、現在人々の心をまどわせているこの言葉が効力を失っても、どうして悲しいことがある。失われ、忘れられてしまっただけなら、なんとも悲しいのは、あの心のざわめきだ。運動の突出部のもつ、危険への不安と緊張、そして発見への期待。突出部の仲間での、競いあい、恐れ、焦り、そして融合による前進、それらのなかにあるあの心のざわめきこそが、人をふたたび、新しい地平にかりたてる原動力なのだ。それらのざわめきがなくなったとき、いくら処女地をひらいても、その行為は管理された社会のなかでの、市民運動か市民体操でしかない。運動の突出部は、つねに個人によってひらかれる。状況は、同じ精神を、異った衣をきて現出させる。竜馬のまねをして、羽織袴で革命をしようとする男は、現代にはいまい。竜馬の墓にまいって、決意するような男は、アナクロだ、といって笑われるにきまっている。現代の竜馬は、ポロシャツで、ジャンパーをまとい、ニューヨークと東京のあいだを往復しているかも知れない。バイオニアは、いま、思いがけない衣をきて、ヤジ馬歩道に潜行しているのかもしれない。そうであれば、云うことはない。

ヒマラヤの王国ブータンを訪ねて

松 尾 稔

ブータンは大ヒマラヤ山脈の東南部に位置し、北と東はチベット、西はシッキム、南はインドに接する美しい国である。北の国境線上には7000m級のグレートヒマラヤが聳え立ち、南の国境はヒンドスタン平野へと続いている、起伏の激しい変化に富んだ南斜面の山国である。長い間、「ヒマラヤの秘境」、「なぞの王国」として外界との交渉を絶ち、自給自足的な鎖国を続けてきたことは、この地域に興味をもつ人にはよく知られている。九州よりやや大きいこの王国には、福井県とほぼ等しい75万人の人々が住んでいる。正確には、目下国勢調査を行なっているという。

1 出発まで

京大山岳部には以前からブータンに取組もうという熱心な計画があり、これが実って昭和43年には小野寺隊が、1週間ではあったがブータン入国を果たした。その年の秋、私が次の隊の隊長を引受けることになったが、なにぶんにも極端な情報不足のため、どこからどのようにして、どういう姿勢でアプローチしたらよいのか皆目見当がつかず、小野寺隊によるわずかな情報をたよりに手探りで手紙を書いたり、勉強会をもったりしていた。王弟殿下に対する小野寺、近藤両先生の嘆願書やサンゲイ・ベンジョール氏（当時ブータン政府 Deputy Chief Secretary、現国連担当）への入国許可の依頼状に対して、Unfavourable Climatic situations のため残念ながら許可できない」というブータン政府の公式の返事が、昭和44年1月24日付のダゴ・ツェリン氏（当時 Deputy Chief Secretary、実質的な外務大臣）から手紙でもたらされた。

次に打つ手も思い浮ばず、意気消沈していたわれわれの上に、まったく思いがけない幸運がふってわたるのは丁度そのころだった。ある朝岩坪さんから電話がかかってきて、2、3日のうちにブータン王妃が日本に来られるらしい、中尾先生に連絡があった、という。さあ大変なことになってきた。さっそく中尾先生に逢ってお願いしよう、ということになった。中尾先生の快諾と助言に従い、桑原、芦田両先生を中心にした夕食

会や京都案内の具体的な計画を私が作るようになった。それからの数日間の興奮は、恋がうまくいきそうになったときよりもはるかに大きなものであった。都ホテルで、はじめて、美しい王妃にお目にかかったときの心臓の高鳴りはもうどうしようもなかった。京都での最後の日、タツラさん（Tashila 殿下、王妃の妹君）の取りもちや、先生方のサポートや、さらに一心同体で私を助けてくれた笹谷の助力やらが実を結んで「王妃のお客としてブータンにお招きしましょう」という言葉をいただいたときの嬉しさはちょっと表現できない。

3月の下旬になって、まず王弟殿下から私宛に「ブータン政府は no objection」という手紙がとどき、つづいてダゴ・ツェリン氏から「京大隊の件を慎重に再検討したところ、Climatic Conditionsは might be favourableということになったので、ブータンへ来ることを許可する。隊員の詳細等をすぐ送ってきなさい」といううれしい手紙がやってきた。そしてとうとう4月の下旬には、桑原先生には自筆で、また私と笹谷宛にも、京都での感謝と私たちのブータンへの取組み方を高く評価する内容を含んだ招待状が王妃からとどいた。

われわれは喜びいさんで具体的な準備を進め、44年8月4日暑いなかに、先発隊として副隊長の吉野をインドに送った。インナーライン許可の取得について、われわれはもう安心しきっていた。吉野と相前後して8月4日には、隊員の田中、米本を荷物とともに船で出発させた。

2 困難な入国

ブータンへの入国は、一般に、極めて難しい。まず第1に、ブータン王室やブータン政府からの招待状が必要である。ビザの代りとなるこの招待状をもらうことが容易ではない。第2にインドの北方地域を通過するための許可が必要である。「インナーラインパーミット（以下ILPと略記する）」と呼ばれるこの許

可証の取得が難関である。中印紛争以来、主として国防上の問題から外国人が北方地域に入ることを極度に嫌うインドは、国内にインナーラインを設けて、それより北に立入ることをきびしく制限しているが、これが結果的に、ブータンへの入国を二重に困難にしている。

さてインドに渡った吉野は、ニューデリーの日本大使館をとおしてインド外務省と接触し、ILPの取得の努力を続けていた。はじめのうちは、2,3日中にもとれそうな手紙が来ていたのが、だんだんあやしくなり、9月18日には宇山大使発信の「インドの許可がとれそうにない、京大に伝えよ」という公電が日本の外務省経由で私のところに送られてきた。すでに、準備はすべて整っている。何が何だかわからない。ともかくえらいことになってきた。ばたばたと何度か鳩首会談を開いた。いい知恵は浮ばない。しかしもう後にはひけない。隊の責任者がインドへ行ってもう一度最善を尽す以外に道はない、ということになり、9月16日桑原先生と私が急遽ニューデリーに飛んだ。

もちろんわれわれもブータン入国の難しさはよく知っているつもりでいたが、今回の調査隊は、ブータン王妃のご招待であるからと、楽観していたのがいけなかった。本隊6名のインナーライン通過をピシヤリと断られた。ニューデリーに着いた当日、ホテルに待っていたのは「松尾他5名の許可は出せない」というインド政府の冷たい通告だった。

それからの約40日、インドでの交渉と待機は本当に長くいやなものだった。はじめての外国がインドとは、私も本当についていない。桑原先生や吉野との、愉快で、逸話になりそうないろんなことを除けば、何もかもが、愉快でなかった。日本大使館のこと、インド外務省のこと、書いておかなければ、と思うことは沢山あるけれども、紙数の都合もあるので先を急ぎたい。ただ以下のことだけはどうしても書いておかねばならない。

まずわれわれとしては、王妃に電報を打って助力をお願いするとともに、いまのところ“Pending”になっている桑原、笹谷の許可取得に全力を上げる。2人が入国した上で、国王と王妃に懇願し、インド政府にはたらきかけていただく以外、もう方法はなかった。このように沈んだ状態にあるとき、丁度デリーに出て来られた西岡さん（注）から得られた情報と「ブータン帰任次第全力を尽そう」という約束は、われわれをどんなに元気づけたことだろう。西岡さんの情報で大切な点を整理すると、①、ブータンの政府レベルの招待（注）昭和39年以来ブータン国内で農業指導。ブータン内での声望は絶大。45年度よりAACK会員

者がインドから拒否されたことはあっても、王室の招待者が入国できなかった例はない、②44年4月からブータン内にもインナーラインが設けられ、山に近付くのは困難、③、ブータン側は受入れにまったく問題はなく王妃が国王と「京大隊が旅行する場合のルート」まで相談されてたという、④、「山」とか Scientific research というのをインドがいやがるのではないかと、また期間が長いこと、人数が多いことも同時に重要ポイントになっているのではないかと、というようなことだった。

このような点を参考にして、桑原、笹谷のApplicationは「1週間、観光」ということにし、われわれは起こりうるあらゆるケースを考えながらひたすら待っていた。9月23日になって、王妃から「あなたがたがILPをいまだに取得できなことを聞き大変憂いている。国王陛下はあなた方のブータン訪問をすでに数ヶ月前に許した。あなた方の許可を発行するようインド政府に再度要求する」という電報が桑原と松尾宛にとどき、ついで24日「桑原、笹谷1週間に限り許可する」旨のインド政府からの連絡が大使館経由でとどいた。とうとう第1の難関を越えることができた。しかし果して第2、第3の難関を突破することができるだろうか。

2、3日前にデリーに着いた笹谷を加え桑原、松尾、吉野の4人で長時間をかけて種々のことを検討し、結局2人は9月29日ブータンへ出発することになった。29日午前3時、空が明けやらぬ中を、2人を乗せたDC3が飛立っていった。本当に、祈るような気持だった。

桑原先生からの吉報を、私は5名の隊員をかかえた隊長として、毎日いらいらしながら待っていた。炎熱のインド、不安といらだち、まったくどうしようもない毎日だった。インドへの留学生として、カルカッタに滞在する若いブータンの青年たちと話し合うことだけが救いだった。彼らは実に礼儀正しく、謙虚で、真剣な眼差しで国の将来を熱っぽく語った。私は、日本の大学ではみられない新鮮さと驚きを感じ、美しい青年たちと思った。

桑原先生と笹谷は10月7日に日焼けてカルカッタに戻ってきた。2人の努力、ブータン側の助力の甲斐あって、10月17日とうとう「松尾他5名のILPを発行する」というインド外務省の言質を得た。しかし実際の許可証を手にした22日までは安心できなかった。嬉しいことというよりも、あーあ、やっとなことというのが実感だった。何故なら、許可の期間はたった「1週間」だったから。

桑原先生と笹谷は10月7日に日焼けてカルカッタに戻ってきた。2人の努力、ブータン側の助力の甲斐あって、10月17日とうとう「松尾他5名のILPを発行する」というインド外務省の言質を得た。しかし実際の許可証を手にした22日までは安心できなかった。嬉しいことというよりも、あーあ、やっとなことというのが実感だった。何故なら、許可の期間はたった「1週間」だったから。

10月25日、「許可のとれたことを喜ぶ、近いうちに

お逢いすることを楽しみにしている」という王妃からの電報を受取った。王妃におすがりするしか方法はない。ブータンへ入ってから期間延長のプッシュをお願いしてみよう。28日にカルカッタを立つことに決め、準備万端整え、いろいろと作戦をねった。

3 国境の町を通つてパロへ

10月28日、空が白みかけた早朝、DC3でカルカッタを飛び立ち、ブータン国境に近い小さな町テレバラに着いたのは、7時半ごろだった。草っぱらのこの飛行場には、王妃付の武官であるリンジ大尉が出迎えてくれた。有能で、陽気で、それでいて実に礼儀正しい、この29才の大尉の助けがなければ、ブータンにおけるわれわれの旅は、大変なものであったに違いない。

この日は、真青に澄みきった、明るい、本当にいい天気だった。2台のジープをかって、ワクワクしながら、ブータン側の国境の町ブンツォウリンに入った。9時半だった。国境のゲートを通りすぎると、私たちの車は舗装されたゆるやかな坂道を登って、小じんまりとしたゲストハウスの前に着いた。庭にはバラやブーゲンビリアが咲きみだれ、その中央には国旗掲揚のためのポールが立っていた。ブンツォウリンの責任者のナムチュウ氏が入口で出迎え、心からの歓迎してくれた。ここで私たちは生れてはじめての、ロイヤルゲストとしての丁重なもてなしを受けることになった。レブチャで、顔や身体付きが松田とそっくりなナムチュウ氏は、国境通過に必要なインド側のあらゆる手続きを、1人で手際よくやってくれた。

ブンツォウリンは、ブータンの窓口である。ブータン国内の旅行を一通り終えた人の目には、この町は、きっと大都会としてうつろである。他の町や村にみられないものがいっぱいある。穀類、衣類、酒、タバコ、ラジオ、竹製品、金物、石油ランプ、何でも売っている。散髪屋もあれば、写真屋、時計屋まである。一般の町村には、専業の商人はほとんどいないが、ここだけは特別である。郵便局もあれば、昭和45年3月28日設立というブータン唯一の銀行まである。この町が、ブータンの今後の発展に果たす役割が大であることは疑いない。

ジープの整備の都合で、この日はここに泊ることになった。

あけて29日、2台のジープと、荷物を積んだ2台のトラックでブンツォウリンを出発した。文化の中心地であり、王妃のパレスのあるパロまでは165km、ジープで約6時間である。中尾先生が、山ヒルに悩まされながら、8日間かかってたどりついた11年前と比べると、何と便利になったことだろう。標高270mのブンツォウ

リンを出ると、すぐ道はものすごい急坂となる。平原の突き当りに、突然巨大な壁が立上ってくるのはヒマラヤの特徴である。急峻な山脈をえぐって、舗装された2車線道路がパロに通じている。スリルに富んだジープの旅だ。途中標高2700mのチマコティの休憩所で昼食をとり、この道路の最高点（標高2900m）を通過すると、道は急な下り坂となる。石を積重ねて粘土で固めたような擁壁が随所にみられるが、去年の災害で山肌が崩壊しているところも多い。ティムプーとの分岐点の橋を渡ると、道は、澄みきったパロ川に沿ってゆるやかにのぼっていく。やがて忽然と開けた谷あいが見われてくる。パロだ。稲を刈り取った直後の淡い緑と土色の中に、白い壁の農家が点在している。屋根には赤いチリーが干してある。中央には繊細で、しかも華麗な四層建築のパレスが建ち、その上方には白壁のどっしりとした城リンブン・ゾンが印象的である。ゆったりとした、非常に豊かな感じのする、実に美しい谷あいである。

私たちは山の中腹にあるゲストハウスに案内された。王妃がとどけて下さった夕食は、ヤク肉をふんだに使った煮込み料理で、インドでは味わえなかった久しぶりのご馳走であった。王妃の秘書のチョウダ・ツェリン氏が訪ねて来て、リンジ大尉もまじえ明日からのことをいろいろと打合わせた。明日は王妃にお目にかかれるという。

4 王妃との再会

10月30日の午後3時、私たちは全員、インドでは一度も着なかつた背広を着、ネクタイをしめ、胸のポケットからはハンカチをのぞかせ、とっておきの盛装で、リンジ大尉の運転するジープに乗ってパレスにむかった。英語つかいの笹谷はいないし、ああ言おうかな、こう言おうかな、と思っているうちにパレスの門に着いてしまった。うまくやれるかな？いやいや心こそが大切だ、心でいくことにしよう。緊張しながら石畳を歩き、パレスに入り、黒光りする木の階段を登って、とある部屋に案内されると、そこに王妃が第一王女とともに立っておられた。お2人とも、きらびやかなうちにも落ち着いたチベット風の服をまわれ、少し首をかしげて微笑された。私は心からのお礼を申し上げ、隊員を紹介した。王妃からは歓迎とねぎらいのお言葉があった。私は王妃とともに正面に、吉野と松田は王女の両側に、というように腰かけ、私たちはお茶をいながら飲んだ。王妃は終始やさしく、微笑をたやみ話しかけられた。いつのまにか私たちの緊張もときほぐされていた。

私がブータン入国に際する王妃のご尽力に対してお礼を上げると、「ILP発行の促進に関しては、内

務大臣を通して私信をインド政府に送りました。自分のゲストを長い間インドで待たせたことは恥しい。あなたはいつまでブータンにいてもよいし、国王陛下が許されるならブータンのどこへ行ってもかまいません。I L Pの延長については、すでに内務大臣からインド政府に言っているから心配することはありません。日本とはもっともつと緊密な関係をもちたい。」と親しい態度でお話しになった。また次の言葉を聞いたときには、その心づかいとなみなみならぬご好意に感謝の念でいっぱいになった。「吉野、山本がブータンに残ってくれることは大歓迎で、すでに彼らの家も準備してあります。明日にでも見に行ってください」

2月に王妃と京都でお目にかかったときに、私は、私たち京大の、真剣で、真面目で、息の長い、そしてブータンの発展をこそ心から願っている姿勢を懸命に説明申し上げ、もし望まれるならば、そしてもしお許しただけならば、吉野と山本をブータンに留め教育や農業の分野で奉仕させていただきたいとお願いしてあったが、その実現はきわめてむずかしいと考えていた。「すでに家まで用意してある」と聞いて私たちはもう有頂点になっていた。

夕方になって王妃と第一王女はパレスの外門のところまで、私たちを見送って下さった。

東ブータンへの旅行に出るまでのそれからの2週間は、私たちにとって今までに経験したこともない優雅な、しかし時には緊張し、新鮮な知識欲にかりたてられるパロ周辺の生活だった。その後の旅行で知ったことも含めて、ここで少しまとめて書いておこう。

5 日本人とそつくりな村人

ブータンに来てみて驚いた。どこで会うブータン人も、顔や体格が日本人とそっくりである。男は日本の丹前や厚子に似た着物を着ている。この衣服は「ゴー」と呼ばれているが、着物の裾をひざまでたくし上げ、たくしあげた分だけふところをふくらませていると思えばよい。そして、ゆったりしたこのふところには、かみタバコに似たドマや手拭はよいとしても、竹で編んだ弁当箱や湯のみ茶わん、さらに刃渡りが40~50cmもある短剣まで入れている。風呂敷や鞆のようなものを持つ習慣のない彼らにとっては、この上もなく便利なことだろう。

髪をショートカットにしたこの国の女性は、健康で、恥しがりで、チャーミングである。彼女たちが一番恥しがるのは、人に膝をみられることである。遊びに夢中の小さな女の子でも、ひょっとした拍子に膝が現われると、大あわてに隠して真赤になっているのを見かけた。もちろん、彼女たちの着物は足もとまであ

る。ふところに大きなふくらみをつけて、一切合切をつめこんでいるのは、男と同じだ。男の着物も女の着物も、布地は立派な木綿地である。外出着には、色彩豊かな、彩やかな模様が織り込まれている。絹の着物は、特別に珍重されている。

旅に出たときなど、すれ違う大人や子供たちが、気軽に土地の言葉で話しかけてくることもあった。ブータン風の帽子でもかぶっていると、もう弁解の余地はない。話しかけた方が、最後まで日本人とわからずに、ケゲンそうに首をかしげて行ってしまうこともあった。言葉が通じないらしい、とみてとった少年に、突然英語で「あなたは何村からやって来たのか?」とたずねられたときには、さすがの私も本当にびっくりした。それほどわれわれの顔付きは似ている。

ブータンの町は、日本では村という方が適切だろう。川のそばや、山の腹に家が建っている。構造は一階が牛馬や豚などの家畜用で、居間や台所、便所などは二階、三階にある。基礎には石、壁には粘土、床や柱には木材を用いている。木材の組立ては、日本の古い寺や塔にもみられるような巧みにはめ込むやり方で、一般にクギは用いない。壁用の型枠に粘土をつめ、歌いながら、リズムカルに突き固めている娘たちの姿は、平和そのものに思えた。家を建てるときには専門の大工に依頼するという。

屋根は板ぶきで、その上に石を置いている。部屋の窓には、ガラスの代わりに竹で編んだスタレがはめ込んでいる。ブータンの家の表側は必ず東向きになっている。別に宗教的な意味があるわけではなく、採光のためだと聞いた。おのおのの家には必ず仏壇があって、ブータン人の信心深さを示している。一般の農家の敷地面積は60坪前後のものが多かった。インドやネパールの一般農民の家に比べると、彼らの住居は実に立派なものである。標高の高い所と低い所に2つの家を持ち、春になると高地の夏の家に、冬になると低地の冬の家に移り住むブータン人の多いことは、別荘など夢物語りの私たちを驚かせ、うらやましがらせた。

6 常食は肉の煮込み料理

ヒンズー教徒のインド人が牛を食べないのに比べて、仏教徒であるブータン人は、牛肉や豚肉を好んで食べる。ジャガイモ、カブラ、タマネギと、ヤクの肉や豚肉をブツ切りにする。それをナベに入れ、塩と香辛料とトウガラシをたっぷり入れた煮込み料理をこしらえる。これが彼らの常食だ。なにしろブツ切のだから小骨が残る。食べるときに、この小骨で口の中を切ることがある。味はすこぶる辛い。実にうまい。脂肪分が多く、栄養も豊かである。ただ、青い野菜はきわ

めて少ない。輸送、経済の流通、農作物の商品化が進んで、多くの人が青い野菜を口にすのも案外近い将来のことかも知れない。

主食には赤米(あかまい)のご飯をたく。ナベに湯を煮たぎらせて、その中に赤米を入れる。ふきこぼれてもそのままにする。米が柔らかくなると、残った湯をザツと捨て、あとは火のそばに置く。炊き上がったご飯はあずきのない赤飯のように赤い。この料理法は、ご飯をたくというデリケートなものではない。ブータン人は、豆をゆでるのと同じ感覚で米を炊く。茶の中に大量のバターを入れたチベット・ティーも、食事ときには欠かせないものの一つである。

風呂は焼き石を利用する。まず川の近くの地面に、西洋風呂よりやや小さな穴を掘り、木のわくを組む。溝を掘つて、川の水を引き、それに満す。同時に、そのそばで大きな焚火が燃されて、石が焼かれる。真っ赤に焼けた石を、地面の風呂オケに投込むと、立派な風呂が沸く。熱いときには、泥でせき止めてある流れの水を引き込んでぬくする。ときには泥水なものには閉口するが、野趣豊かなものである。この風呂も、そうたびたびは沸かさない。種まきのときや収穫のときは、村のあちこちで煙がのぼる。

7 スポーツと言葉

ブータン人の生活は、一般のインド人やネパールの生活に比べると、はるかに豊かで、素朴である。このような衣食住の豊かさの結果とも思われるが、ブータン人は、礼節や仁義を重んじる。

特に正式の場や人前で、秩序を無視した態度やマナーの悪さは嫌われる。物質文明が人間の生活を侵すようなこともなく、彼らには、釣りや弓やダンスを楽しむ精神的なゆとりがある。特に、弓は国技であり、冬のあいだは、大勢の人々があちらこちらで弓の試合を楽しんでいる。老人や子供や女たちも、手をたたき、ダンスをして応援する。百メートルも向うから放たれた矢が、小さな的に当たるとそれこそ大変である。歓声を上げるもの、踊りだすもの、陽気で楽しい試合だ。惜しいところではずれると、頭をたたき、シャガみこんでくやしがる。朝早くから、弁当持参の試合は夕暮れまで続く。しかも試合は、互いの本拠地を訪れあい、食事や酒をふるまいながら、3日も4日も続くのである。

言葉は谷ごとで異なる、といってもいい過ぎではなさそうだ。主として西ブータンで使われているゾンカーが標準語になりつつあり、この言葉だけが書く文字を持っているという。ゾンカーの数のかぞえ方は、日本語によく似ている。1は「チー」、2は「ニー」、3は

「スン」、4は「ジー」……という調子で、数に関しても、われわれが覚えるのに苦労はなかった。南ブータン地域に古くから住みついたネパールのネパール語を除いて、ほかに3つのおもな方言があり、お互いに通じない。単一言語を話す日本人からみれば、ずいぶん不便なことだろうと思われる。

ブータン語はチベット語に似ているように思えたが、私には詳しいことはわからない。ただ何人かのブータン人が、「ブータン語はチベット語の方言ではない。ブータン語はブータン語だ」と強い調子で云っていたのが印象に残っている。

さてパロ周辺での2週間あまりの間には、いろんなことがあった。リンブン・ゾンからのパロ谷のながめは素晴しかったし、弓の試合と鱒釣りを兼ねたピクニックは実に愉快だった。パロ中学校を見学して先生や生徒と話し合ったこと、王妃が王子や王女のために7日間の祈りをささげられるケチュ寺院を訪れたこと、切立った岩壁にへばりつくようにして建っているダカップ寺院で信者と同じように、ものすごい洞穴くぐりをしたこと、王妃の弟君のベンジョール・ドルジ氏(最高裁判事)の家に夕食を招かれたこと、一年前に京都で逢った農林次官のベマ氏がお土産をもって訪れてくれたこと、ある熱血漢のブータン人がブータンに対するインドや中国の大国主義的なやり方を義憤をこめて語った後「沖繩をどうするのか、アメリカのやり方をどう思うか、Profノ」とするどく私につめよってきたこと、ブータンには昔から家の中に花をかざる習慣があると聞いたときに感じた親しみ、等等書き出したらきりが無い。しかし紙数の都合もあるので、特に印象深かった2、3のことを書くことにとどめよう。

8 国王のもとティンブーへ

連日同じような天気が続いている。午前中はほとんど風もなく、すきとおるような快晴。午後になると雲がでてきて、風もかなり強くなる。夜にはまた晴れるが、標高2940mのパロはさすがに寒い。湿度はいつも40%を割っている。

11月6日に国王と内務大臣に逢えることになった。アレンジはすべて王妃の命を受けてリンジ大尉とチョウダ・ツェリン氏がやってくれる。パロから首都ティンブーまでは2車線道路が通じている。

ティンブーに2日間滞在の予定で、私たちは午後3時半にパロを出発した。例によって、王室のジープを運転するのはリンジ大尉である。

ティンブー川にそつて登りだすと、この谷の様相がパロ谷の感じとまるで違うことに気付く。紅葉した木が多いためか、パロよりも色彩が豊かで、日本の

秋の山間地域を思わせる。

パロの豊かな、田園的な感じはここにはない。しかしさらに中心地域にすすんでいくと、そこには、今までみてきたブータンと、まるっきり違った新しいブータンを見るに違いない。点々と見える多くの家、青い屋根の軍舎、病院、多くの立派な商店、郵便局、それに映画館までであるではないか。建設途上の多くの建物や道路、そして、それに先立つ伐採や整地、さらに伐採跡を焼く煙が夕闇せまる空に立昇っていく風景をみつめていると、正に建設途上の首都、前進するブータンの活力が感じられる。行交う村人にまじって、パロではみられない赤ベレーの王室近衛兵、グリーンベレーのブータン兵、青ベレーの警察官の姿にも何となく活気がある。中心にどっしりとかまえている政治の中核ティンブー・ゾンの偉容が印象的である。注意深くながめると、ティンブー谷そのものは狭い谷だが、右岸のふところはパロよりもずっと深く、それだけ開発の可能性は大きい。ここに首都を移されたのは国王の惻愍だろうか。ただインド人がやたらと目につくことが気になる。

映画館にかかるケバケバしいインド映画の看板「Trip to Moon」を一瞥し「インドが月へ旅行とは」と高笑いするブータン人の姿は、私には微妙で、印象的であった。

私たちのジープが、山の中腹の迎賓館に着いたのは丁度5時だった。

あけて11月6日、朝7時ごろまでのティンブー谷は、谷一面に朝もやがかかって、夢のように美しい。

パロよりもティンブー（標高2750m）の方が寒い、と聞いていたが昨夜はそれほどでもなかった。

8時半、私たちは緊張感につつまれながらティンブー・ゾンに向った。中心地区に入ってくると、No Phoneのプレートが立っている。ティンブー・ゾンは、他の地域に残る古城とは異なり、古いゾンのチャペルを中心にして、1966年に新しく建築されたものである。ブータン古来の城造りの手法にのって、新しく構築されたこの白壁の、大きくて美しいゾンは、そのまま、伝統を重じながら徐々に近代化をみぞす現在のブータンの姿をあらわしている。衛兵の立つ門を通り、ティンブー・ゾンの中に入ると、あちこちに正装のブータン服をまとった、この国の官僚たちの姿が目につく。案内されるままに謁見室に伺候すると、部屋扉のそばにはすでに国王が立っておられ、握手をもって迎えて下さった。あまりにも気さくな、無雑さなそのやり方に、むしろ私の方がドギマギしてしまった。42、3才になっておられるのだろうか、ブータン風の礼装の国王は中肉中背のがっしりした、朴訥な感じ

の方であった。

1時間もの間国王とお話してきたことは私たちにとても非常に幸運であった。

まず私は、私たちのブータン訪問と、当初1週間のILPであったにもかかわらず、ブータン滞在の延期を許可下さったことにお礼を申し上げ、次にわれわれ京大グループの立場と考えを述べ、具体的に2人残留についてお願いした。これに対して国王は「それはWelcomeである。しかし彼らはブータンに留まることを幸福と思うか?」とおたずねになったので、吉野、山本二人から直接決意と希望を述べさせた。ついで私がお願した東部ブータンの旅行についても、快く許可下さり、「Prof.は疲れないように」とおつしやった。

国王とお話ししている間に私たちの緊張も徐々にほぐれていったが、特に、しきりにおすすめるたばこを私が遠慮しつづけると「Prof.あなたはたばこをすわないのか」とおたずねになった。私は困ってしまい、「いっものはすいますが、国王の御前ですうわけにはまいりません」とお答えすると、「そんなに堅くなる必要はまったくない。」と手をとらんばかりにしてすすめられるので、私も1本頂だいしてたばこをすった。それからの雰囲気は何となく柔らかくなり、日本とブータンは顔付きや宗教やマナーで類似点の多いこと、そういう日本との交流をもっともっと盛んにしたいこと、自分も近い将来に是非訪問したいこと等を気軽に話になり、天皇陛下のお年や研究されている植物学のことなどをおたずねになったりした。

謁見室内での記念撮影もお許しになり、帰るときには1人1人に記念品を下さり、戸口で握手して見送って下さった。すべての希望があまりにもあけなく許可され、私たちは安堵と喜びをもって退室した。

それから私たちは、同じゾンの中で内務大臣タムジ・ジャガル氏にお目にかかった。ILP関係をすべてやっていただいている大臣は、50年配の、非常に恰幅のよい柔和な感じの人物であった。私たちのILP延長については、とりあえず2週間の延長をインドに申請してあるということであった。私は心からのお礼を申し上げ、吉野、山本の長期残留を含めて、私たち全員のさらに延長手続きをお願いすると、「ブータン内で申請できる延長期間は2週間間位であるが、できるだけのことでしょう」という返事であった。

気分的に非常に疲れたが、大体何もかもうまくいったようで嬉しかった。

9 ハへの1泊旅行

私たちは、許されるかぎりできるだけ多くの地域に

行ってみたいと考えていた。それに、ブータンで最も有名な山であるチョモラリ(7314m)を是非ともこの目で見たいと願っていた。ハはパロの西方にあり、その間には3500mほどの峠がある。この峠からきつと見えるに違いない。私はハへの1泊旅行を王妃にお願いした。

11月8日、私たちはキャンプ道具をジープに積み、リンジ大尉の運転でハに向って出発した。私たちが狙っているのは明日である。明日は、ハからパロまで峠越えて歩いて帰ることを是非とも大尉に認めさせなければならない。ティンブー川とパロの分岐点までくると、ここからハへの道が分れハまで83kmの表示がでている。ワン川右岸ぞいの道をしばらく南下する。左岸には、急斜面を這うように、曲りくねった、プンツォウリンからの幹線道路が低く、美しく望まれる。分岐点から31km下ったオナカから、道はワン川を離れハ川に入る。ハ川に沿って登りだすとまず目につくことは、右岸がうっそうとした森林であるのに対し、左岸にはパラパラとしか木がはえていないことである。その見事な対照はどうしたことだろう?

まわりの畑に目をやると、麦の若芽の薄い緑、黄色のからし、黄緑の野菜が色彩豊かにコントラストをみせている。ジャバナ村と呼ばれるこの地区では、麦の植付けがパロやティンブーより早く、またジャガイモやからしなどの栽培も盛んで、パロ、ティンブーに売りに行くという。

車は相変わらずすごい砂煙をあげながら登っていく。ハ川の両側は山がするどく、狭くせまり、廊下状をなしている。「ダムにすれば沢山水がたまるなあー」などとぼんやり考えているうちに、やがて谷が開けてハに入ってきた。谷の周辺はパロやティンブーに比べるとかなり狭く、山の中腹にまで這い登るようにして畑がつくられている。麦をまいたあとで、土の色にうっすらと青味がかかっている。取除くにはあまりにも大きすぎるのであろうか、その畑の中にはところどころに岩が出ており、一風変わった石庭を見ているような感じがする。家屋は、パロやティンブーで見かける、壁の多い、がっしりしたものではなく、やや繊細な感じのする木造である。見た目には美しいが、冬の生活には適さないという。この人たちは冬になると暖かいプンツォウリンなどに移り住むらしい。

6時ごろハ・ゾンの下流の河原にテントを張った。大尉の釣ってきたマスの塩焼きがうまかった。「峠越えて歩いてパロに帰りたい」という希望を認めさせるのに大分時間を要したが、大尉は、「車があるのにわざわざ山道を歩かなくてもいいじゃありませんか」と言いながらも、結局この希望を受入れてくれた。

11月9日、朝から絹雲が出ているが、よい天気である。キャンプ道具を積んで大尉はジープでパロに帰り、今日の道案内はジョーがすることになった。ここでジョーのことに少し触れておこう。彼は、一口で言えば、王妃のパレスのボーイ長のようなものである。英語の単語は少ししか知らないが、礼儀正しくて、がっちりした、29才の仲々の好男子である。私たちがパロに着いたときから、王妃の命により付きっきりでいろんな世話をしてくれる。もちろん、どこへ行くのも常に一語である。私は、彼の年令を聞きだすのに随分苦労した。単語を並べ、身振り手振りをまじえながら「私は33才だ、お前は?」と聞くと、彼は始めは驚いたような顔付きで、それから人差し指を立て、何となくゆるんだ表情で「1だ」という。いくらいっても「1だ」と主張するばかり。とうとう私は投げ出してしまったが、翌日になって大尉から、ジョーが「教授サンというのはドエらい人だと聞いていたけれど、奥さんが33人もいるとはブツまげた」と言ったというのを聞いて、みんなで大笑いしたことがあった。

さてハ谷からパロ谷に至る道は合計4本あるらしいが、私たちはカリ峠を越えて、パロ谷のケチュ寺院に抜けるルートに行くことになった。

8時50分、ハ・ゾンから500mほど上流で、見送ってくれたリンジ大尉と別れ、細い山道を東へ向って登りだした。久しぶりに、「山を歩いている」という気分になり、みんな最初は張切り、快調だったが、そのうちにバテる者もでてきた。12時15分、カリ峠に着いた。高度計を見ると3600mである。ハが2500mだったので、約1100mの登りである。峠からの眺めは仲々いいが、肝心のチョモラリが見えないではないか?

最初の目算が狂って私は少しあわてた。ブータンの人にたずねると、国境の白い山は全部「チョモラリだ」ということになる。このままパロ谷に下って行って、本当のチョモラリが途中から見える保証はない。大尉がいなくて多少気がひけたが、峠にジョーを残し、ここから北西にのびる尾根を少し登ってみることにした。2つのコブを越えて3つ目のコブのピーク(高度3700m)に達すると、突然正面にブータンヒマラヤの盟主チョモラリの偉容が姿をあらわした。水平距離にして50kmぐらいであろうか、手のとどくような近さにチョモラリ主峰の、真白で優美な、女性的な姿があった。手前にのびたならかた、長い尾根をたどれば、容易に頂上まで行ってしまいそうな気がする。主峰の東側には2峰、3峰ともいうべき真白な、三角形のピークが続き、北東遠くにも白いピークがいくつか見えるが、ガンケルプンツム(7550m)は定かではない。北西にはクングガン(6100m)を中心とする山々、

さらに南にかけては、シッキムやインドとの国境へと
のびる5000m前後の山々が望まれ、まったく素晴らしい
ながめだった。

パロまでの1400mの下りはさすがに足にこたえた。
2時40分に峠を出発して5時過ぎにはパロのゲストハ
ウスまで帰ってきた。

身体を洗うとさっぱりした。下男が運んでくれるバ
ケツ1杯の湯と、バケツ1杯の水で、頭から爪先まで
きれいに洗うことも上手になった。

10 旅に出るための準備

ブータンの主要な町、すなわち文化の中心パロ、首
都ティンブー、かつての首都プナカ、地方都市のハ、
ウォンデポダン、トンサ、ブムタン、タシガン、など
は、ほぼブータンの中央部に東西の一直線上に並んで
いる。北の方に立入ることがほとんど不可能な現在、
私たちは、できるならば、中央ブータンを通り東端の
町タシガンまで旅したいと願っていた。そして幸運に
も、王妃の並々ならぬご尽力と国王の特別のご配慮の
もとに、タシガンまでの調査旅行は許可された。

私たちは、リンジ大尉とジョーに相談して、次の
よな大体の日程を組んだ。

1日目	2日目				
パロ	ウォンデポダン				
3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	
サムテガン	リダン	ルンティ	セフ	ミン峠	ト
8日目	9日目	10日目	11日目	12日目	13日
サーゲ	チャー	ブムタン	ウラー	セン	ゴルー
リメ	タン	目	14日目	15日目	
コレ	峠	ガツァン	タシガン		

もちろん、正確な地図がないので上記の町村の位置
すら定かでない。果してこのとおりにいけるかどうかの
保証はないし、さらに重要なことは、休みなしの非常
な強行軍を行なったとしても、タシガンまで15日、帰
りのルート次第では全体でかなりの日数を要するとい
うことである。私たちには、申請中のインドのILP
の延長がいつまで可能か、というわずらしい問題が
常につきまわっていた。

ハから帰った翌日(11月10日)シッキムのガントクに
行っておられた西岡さんがパロに帰ってこられた。私
たちは、ブータンの中で再会できたことを心から喜び
あった。この日から後、私たちは常に西岡さん夫妻と
相談しながら種々のことを進めたわけであるが、外国
人としてブータンで信望第一である夫妻の一方ならぬ
好意と助力、常に適切で有益な助言がなければ、私たち
のブータンの実績は半減していたに違いない。

さて、ILPの延長が非常に難事であることが次第
に明らかになってきた。予想していたことではあった
が、王室の方々が示して下さるご好意とは別のところ
での問題、すなわち対インドとの実務レベルで難航し
ていることがわかってきた。すでに書いたように、私
たちがブータンへ入国した時点(10月28日)での許可は11
月3日までの1週間であり、その後内務大臣の努力によ
って11月17日までの2週間の延長が認められている
に過ぎなかった。11日夜になって、実務レベルでは、全
体として1ヶ月ぐらいを限度と考えているらしいとい
うことがウスウスわかってきた。そして現在申請中
である18日以降の許可がおりた後に、その日数に従っ
て旅に出たい、というティンブーからの連絡がチョ
ウダ氏を通してもたらされた。私は頭をかかえこんで
しまった。「さあどうしたらいいだろう。」私には、王
室や政府、さらにインドとの間の実務関係の有機的な
つながりがどうしてもはっきりつかめない。いくつか
の方法を考え、結局次のように決定した。

(1)18日以降の許可がとれなかったときは、ウォンデ
ポダンとプナカにだけ行ってパロに戻ってくる。

(2)18日以降2週間、すなわち12月1日までの許可が
おりたときには、ともかくトンサまで行く。そしてト
ンサからティンブーの内務大臣に連絡して、「さらに12
月2日以降の2週間の延長手続きをお願いできるかど
うか」をたずね、「無理だ」ということであればブ
ムタンあたりまで行って戻ってくる。もし「次の2週間
もOKとなるだろう、タシガンまで行ってもよろしい
」という許可が得られれば、そのまま東に向かって出
発する。そしてこの案について王妃におうかがいをた
てて、その「それはよい考えだ」とおっしゃったこと
であったので、12日の王妃のご招待をお受けした
後、14日から旅に出ることにきめた。

ただ私にはどうしても気にかかることが一つ残って
いた。吉野と山本の長期残留の件である。国王や王妃
のお言葉をいただき、2、3日前までは何の疑いも持
っていないかつたのが、ILP延長が実務段階で予想
以上に難航することがわかってきて、心配は増大してい
った。私は当初「東ブータンの旅行に出る前に、何とか
してこの件に決着をつけておかなければ」と考えてい
た。しかし具体的にどうしたらいいのかが方法がなかつ
た。チョウダ氏に対して「2人の長期のILPにつ
いて具体的な手を打ってこないか」と言っても、「い
ま大切なことは、あなたが旅に出るための許可の取得
である。それが終わったらトライしよう。そうでないと
トラブルが起る。」という返事が戻ってくるのみであ
った。

11 パレスでの昼食会

11月13日は快晴の日だった。王妃に昼食のご招待を
受け、私たちは10時半にパレスを訪れた。この日の私
たちは全員、前日王妃から贈られたブータンの「ゴ
ー」を着ていた。着付けはジョーが手伝ってくれた。上
半身はゆったりしており、下半身は自由で軽やかで、
日本の着物に比べるとウンと活動的である。少々テ
レくさかったがみんな結構よく似合い、慣れない背
広を着ているよりもむしろ締って見えた。

パレスの中の広い庭に、黄色の大きくてきれいなテ
ントが2つ張ってあり、その前で王妃はにこやかに私
たちを迎えて下さった。王妃のそばには14才になら
れる皇太子と3人の王女が控えられ、それに丁度ブ
ータンにいられたシッキム王女のソナム・ドマ・チ
ブチ・ブンカーン殿下や西岡さん夫妻も一諸だった。
主賓の私は、ラマの高僧とともに王妃の両側に座り、
それから4時半まで数時間を過ごすことになった。し
ばらくしてマスクダンスが始った。これは私たちに
のために特別に用意して下さったもので、普通は年
に1、2度のお祭のときに、ゾンの中で行なわれる
ものだという。

赤や黄色のはなやかな袴姿の屈強の男たちが、顔
にはいろんな動物や人間の面をつけ、手には刀や金
棒、鏡や太鼓を持って、笛、大鼓のリズムにのって、
あるときは荘重に、あるときは勇壮に舞い踊る。こ
れらの踊りは、どれもこれも宗教的な意味あいをも
っているらしい。王妃がその都度、物語りを聞か
せて下さったが、それは民話のようであった。

日本の田植え歌にあわせた盆踊りのようなフォ
ークダンスやブータン相撲なども行なわれた。私
たちの方も、柔道を出したり、歌を歌ったりして
楽しく過した。食事も、ブータン風の、種類の多
い豪華なものであった。

夕方になって、私たちがゲストハウスに戻ると、
「明日からの東ブータンへの旅のために」と、い
ろんなプレゼントが王妃からとどけられた。沢山の
米、肉、バター、塩、個人用の非常食、ブータ
ンのラム酒やジン等々。さらに、隊長用という3
本のスコッチまで入っていた。山の旅で、毎晩
スコッチを飲めるなん、私は考えてもみなかつた。
私たちは、感謝の気持ちをどのように表わしたら
いいのかわからない、いつも困ってしまうのだ
った。

11月14日から12月8日までの東ブータンへの
旅は愉快で、有意義なものであったが、紙数の都合
で、これについては他の機会にゆずり、二、三の
一般的なことを書くにとどめよう。なお、松尾、
松田、田中、米本は12月17日に、また吉野、
山本も結局その1ヶ月あとにブータンから出
国した。

12 近代化を目指すブータン

ブータンは、国王の強力な指導のもとに、少しづ
つではあるが近代化を進めている。この国の総合開
発計画は、1961年からの第1次5ヶ年計画がす
でに終り、現在は第2次5ヶ年計画の途中である。
主要な政策は、教育と公共土木事業であり、農業
開発がこれに続く。教育に対する力の入れ方は
大変なものがある。現在国中で小学校が126、
中学校が100校、高等学校4校、さらに工業
専門学校、農業研修所、教員研修所が開設さ
れている。一般教育は、かつてはヒンズー語
で行なわれていた。これを英語に切りかえたの
は、世界に出ていける若者を育てようとい
う、国王の強い決意によってであった。勉強
に対する子供たちの熱心さ、知識欲、それに
マナーの良さには目をみはるものがあった。

旅行中、私はしばしば学校を訪れ、子供たち
と話した。学年の進捗が年齢によってではなく、
能力によっているので、小さな子供も大き
い子供も同じクラスで学んでいる。彼らは
物おじしない態度で、いろんなことを私に
質問した。世界のこと、日本のこと、農耕
や灌漑のこと、飛行機や自動車のこと、男
女の交際や結婚式のことまで、たくさん質
問を受けたが、「日本が現在のように豊かな
国になったのはなぜか？」という問いは、
どこの子供たちでも真っ先に質問の一つ
だった。

この子供たちが、将来のブータンの発展に
大きな力となることは疑いない。ただ教科書、
ノートなどの教材の不足、教員の養成や質
の向上など、まだまだ悩みは多いようだ。
昨年いくらかのノートと鉛筆を贈った
けれども、教材だけでも、もっと十分に
贈ってあげることができれば、と何度感
じたことだろう。

国土開発で特に目をひいたのは自動車道
路建設である。インドに通じる3本の南
北線とハ〜ウォンデポダン間およびガ
ツァン〜タシガン間を結ぶ東西道路は
すでにでき上っている。1976年に第3
次5ヶ年計画が終ればタシガンまでの
中央幹線道路のすべてが完成するだ
ろう。一昨年末の段階で、でき上って
いた自動車道路の総延長は約900km
で、そのうち600kmが舗装されてい
る。すべて2車線で、思っていたより
立派なものだった。主要な町間の交
通を確保する道路建設は、ブータン
近代化のための急務であろう。

現在輸送手段として用いられているのは、
トラック、ジープ、マイクロバスであ
るが、数は少ない。私有の車というの
はきわめて少なく、ほとんどがブ
ータン政府か王室の所有となっている。
マイクロバスは、例えばティンブ
ー〜パロ間やティンブー〜ブンツ
ォウリン間のような主要地域を結ぶ
手段として用いられ、一日一往復の
定期運転をしている。運賃は距離
によって異なる。

るが、ティンブー〜ブンツォウリン間 (174km) を例にとると、人間1人当たり約600円、荷物は35kg毎に約300円程度で、彼らにとっては高い乗物である。

電力の開発は緒についたばかりであるが、パロ、ティンブーにそれぞれ400kw、ウォンデポダンに300kwの小型水力発電がありその他マナス、タンガン、ブンツォウリンではジェネレーターによる発電が行われている。国民が「明るさ」を享受するのも間近いことだろう。

13 政治と国際社会への参加

いずれにしても、ここ数年の間に、輸送その他に大変革がもたらされることは明らかである。

ブータンは1968年から政府に省制を設け、教育、土木、農林、その他を総括する開発省と、他に大蔵省、内務省、商工省を置いた。また最近になって、情報省を設けたと聞く。各部門から出てくる計画は、5月と10月に開かれる国会に提出され、審議されて実施に移される。国会議員は150人で、任期は3年。議員になるのに、男女、年齢などの制限はない。ただし今のところ女性議員はいない。議会内では、国王も一般議員もすべて平等である。

議員の選出は非常に民主的に行なわれており、120人が一般国民から選ばれる。選挙区は村の次に大きい「ツォー」と呼ばれる行政区画で、村人全員で議論し、議員を指名する。この場合、女性の発言力も非常に強いということだ。残りの議席のうち、20人は政府官僚の中から国王の指名により、また10人はブナカにある僧侶の会から選出される。

この国の僧侶は、厳しい求道的な生活をしており、知識人としての社会的地位も高く、国民の厚い信頼を受けている。また僧侶は、同時に人々のよき相談相手でもある。市場で気軽に買物をしたり、日だまりで、村人たちと話しこんだりしているのをよく見かけた。どこの寺院でも、朝早くから、朱色の衣を着た子供の僧が、大きな声でお経を読んでいる。宗教が民衆と深く結びついて精神的支柱をなしている姿には、深く感銘させられた。

全国に主要なゾンが11あり、これが地方行政の中心になっている。昔の大名の居城であり、宗教活動の中心でもあったゾンは、要塞堅固な山腹などに築造された、白壁の美しい大建築である。日本の城のように緻細で、神経のいきとどいた建物ではないが、どっしりと重量感があって、いかにも城という感じがする。

内部には、現在も僧侶の居住する一画があり、この一画には宗教的な壁画が多く残されている。ゾンの現在における主たる機能は、日本の県庁と裁判所を合わ

せたようなものである。ここには、知事ともいうべき地方行政関係の長、ゾンダと、地方裁判所長官ともいうべき司法関係の長であるティンベンが置かれている。司法権は独立しており、地方判事のティンベンによる裁判で決着のつかないときには、5名の裁判官から成る首都ティンブーの最高裁判所に持ちこまれることになっている。なお、宗教上の伝統であろうか、ゾンに入るためにはきめられた正装をする必要があり、また昼のきまった時間を除き女性の出入りは許されていない。

上述の意味での主要なゾンは、ハ、パロ、ティンブー、ブナカとウォンデポダン(1年のうち時期的に交互に使っているらしく、支配地域は両者で一区域)、トンサ、ブムタン、クルテ、シェミガン、ヤンチー、モンガル、タンガンにあり、これを助ける出先機関としてヒルステーションやサブディヴィジョンが南方地域に設けられている。現在のところ、まだ流通経済が未発達であるため、物や労働の値段が「競争の原理」にのっとって決ってはいない。そのため、「安いなあ」と思うものがある反面、あまりの高さにびっくりしてしまうこともある。例えば豚肉がわりに安いのに比べて、宗教上の理由からブータン人が口にしない鶏肉を買おうとするものすごく高い、という調子である。またこれは、ブータン独自の通貨が約25円の硬貨だけで、それさえ十分に出まわっていないことにも原因がある。いまのところ一般に、お金でものを買おうとすると高くつくようである。

ただ税金は夢のように安い。例えば官僚の場合の所得税をみると、約1万円/月までの給料に対してはただ、これを越えると、給料が5000円増える毎に大体50円づつの課税が行なわれる。家屋の場合にはA、B、Cのランクがあり、大家屋のAに対して年間約1200円、Bで700円、小さい家のCでは500円程度である。土地は1エーカー当り700円、また牛や馬の家畜が1頭当り約140円ぐらいである。

さて、ブータンの若き指導者たちは、自国の置かれている厳しい地理的条件や世界情勢の中において、この小国が自主的に存続していくためには、積極的な国際社会への参加以外に方法はない、と強く感じているように思えた。ブータンは国際社会参加への試みの一つとして、1969年東京で開かれた万国郵便連合の大会に加わった。これは国内で高く評価された。このことからわかるように郵政関係にはかなりの力を入れている。部数はきわめて少ないが、美しい、珍しい切手を発行している。最近も薄い鋼鉄やプラスチックに印刷した切手を発行して、世界の切手マニアの話題となった。

§ Epilogue

顔かたちや服装のみならず、風俗、習慣が日本とかくも似た王国がヒマラヤのふもとにあることは、何としても不思議である。ヒマラヤの南山ろく—中国の雲南省—朝鮮—日本を帯とする地域は、植物学的に類似の相を示すといわれている。植物に限らず、人間の文化もその類似性を持つのではないだろうか。自然が人間に与える大きな影響力に考えをめぐらすとき、われわれの学問は、小さな地域社会の問題から、全地球をおおう規模に拡大されていくであろう。

この原稿を書き終るに際して良いニュースが入ってきた。先日、国連安全保障理事会において、今秋の国連本会議に「ブータンの国連加入」を推薦することが決ったという。今後のブータンの健全な発展をこそ心から祈りたい。

